

講演「発達障害等の子どもの食の困難と課題 ～「食べられない」を傾聴と対話で支援する。

講師 金沢大学 人間社会研究域学校教育系
准教授 田部 絢子先生



田部先生は、子どもの発達障害等と食の困難について研究されている、希少な先生です。他県の栄養士会でも、何百人単位の講習会をされています。障害の方について、なかなか健常者には理解できない理由は、感覚自体が違う、ということが大きいとのこと。田部先生は、イチゴの表面をかなりアップにした画像を見せて、例えば食に困難がある子どもたちには、イチゴがブツブツゲトゲトゲした恐ろしいものに見えるかもしれない、ということを体感的に教えてくださいました。発達障害の方は、そのような感覚の偏り、過敏と鈍さの両端が元々あり、周囲の認知能力が低いと障害が重くなるそうです。感覚の偏りによる刺激に対する反応が適切にできず、そのことを理解してもらえないことでさらにストレスにさらされ、自律神経、免疫、代謝、内分泌も順調でなくなるとさらに障害が重くなってしまいます。不安、緊張、恐怖、ストレスを丁寧に把握、理解し、安心安全な状態にすれば障害は軽減するそうです。

「食べる」という行為は、体内に異物を受け入れることであり不安、緊張を伴いやすい営みなので、新しいものを食べてみようとするのは動物で人間だけ、という根本的なところからお教えいただきました。日本は多彩な食があるからこそ子どもの食に悩まれる親が多く、日本の食に対する努力は海外でも関心を持たれているとのこと。では、私たち日本の栄養士は悩まれているご本人の悩みを聞いて、伴走することができているのでしょうか？学校に実際の対応について聞くと、正しい食べ方を指導する、ほめる、希望の量で提供する等、一方的な対応が多いようです。

「子どもの意見を聞く」がトップにならないのはなぜなのか？

指導の仕方、考え方の根幹から変えていく必要があります、問題解決の基本と、現状との乖離を学びました。相談する親も、相談される先生も困っていますが、本当に困っているのは子ども自身です。周囲の一生懸命さが、子どものストレスになり、負のスパイラルに陥ってしまっていることもあるそうです。子どもに限らず、認知症の方に食べていただくことを考えるときも同じことが多いと感じたそうです。質問があり、認知症の方の食事相談を受けた時に、ご本人の意思がはっきりわからない状態だと、どのような対応が正しいのかわからなくなることがあるとのことでした。田部先生によると、ご本人が何を言われているのか認知できなくても、ご本人の周りに集まって話をする場を設けるだけで、自分のことを話してくれているというのは感じるので、大変意味があるとのこと。『必ずあなたを大切にする』という気持ちで、一人の人間として人間関係を作ることが大切とご回答いただきました。学びを生かし、どんな状態の方にも食べる方がいいことだと思っただけのよう、支援をしていきたいです。

(文責 福祉 阿部茉莉)